

University Academic Repository

Vocabulary研究：認知言語学の導入
(100周年記念号)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2003-10-01 キーワード (Ja): キーワード (En): vocabulary, word, sign system, form and meaning, morphology, lexical semantics, mental lexicon, lexicalisation, lexeme, word formation, compound, inflection, derivation 作成者: 高野, 秀之, タカノ, ヒデユキ, Takano, Hideyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/85

Vocabulary 研究

— 認知言語学の導入 —

高野 秀之

Abstract

This paper aims to survey some linguistic research on vocabulary, and to demonstrate a basic idea; that is, the cognitive linguistic knowledge can give the positive contribution not a little to the teaching and learning English as a foreign language in Japan.

As for vocabulary, linguistics provides two relevant disciplines. *Morphology* illustrates the internal structure of words and the process of word-formation. That is how the conceptual stratum of sound, form, and meaning comes to be realised as a word. *Lexical-semantics* provides theory that the meaning of word is associated with the other words in terms of the sense relation.

In many cases, the great effort into the linguistic research on vocabulary is unfortunately regarded as the restriction or rules in language use. However, the fact is that language is much more dynamic in its nature than what has been taught, so that the dynamicity should be emphasized in the context of Japanese education. Then, how?

Cognitive linguistic research would suggest that it is important to involve the nature of human being in language study, considering the human cognitive activity as what provides the reason for the linguistic data. By this, language teachers can explain both the internal structure of a word that would be motivated in many cases rather than arbitrary, and the external structure of the word as the network of meaning in a certain semantic field.

概要

本稿は言語学の語彙研究成果を概観し、認知言語学が英語教育に与える影響について考察するものである。

語彙習得の問題は、外国語を学習する上で避けて通ることができない。この問題に対し、伝統的な言語学はその下位部門である形態論と語彙意味論の研究成果を効果的に利用することを示唆してきた。形態論は語の内部構造と語形式の過程を記述し、語彙意味論は特定の語が感覚関係で他の語とともに意味のネットワークを形成しているということ为例証している。加えて、我々は言語使用者である人間の存在を忘れてはならない。外界に対して、主体的に「意味づけの営み」を行う人間の生得的な特性は、言語の本質に大きな影響を及ぼしているは

ずだからである。言語とは、人間の身体的特性とともに、概念・思考・行動と密接な関係にあり、教室で伝えられている無機質な「科目」よりずっとダイナミックな性質のものなのである。

認知言語学は、人間の認知活動に言語の本質を求めるパラダイムとして注目されている。これまで教室で教えられてきたことに対し、認知言語学なら理由を与えることができるであろう。言語の本質に迫る過程において、その使用者たる人間の主体性を認めることこそ、言語学が学問体系に確固たる地位を得る方法であると信じる。

語学教育の現場で、教員は「言語の知識」を通じて学習者にさまざまなことを伝えている。その際、日常的に関わりを余儀なくされる周辺的な要因によって、しばしば本質的なことを見落とすことがある。つまり、「何を、いつまでに教えるのか」ととらわれ、「どのようにその知識を伝えるのか」を軽視してしまうのである。また、カリキュラムの関係上、別々な能力として開発されているものを統合する機会がもてない状況にある。そうした中であっても、学習者に言語に関する知識をより広く伝えるために、より効果的な指導方法が求められている。そして、それは理論に裏打ちされた、体系だったプログラムのもとで実践されるべき授業であると考えられる。

Key Words

vocabulary (語彙)、word (語)、sign system (記号体系)、form and meaning (形式と意味)、morphology (形態論) lexical semantics (語彙意味論)、mental lexicon (辞書)、lexicalisation (辞書登録)、lexeme (語彙素)、word formation (語形成)、compound (複合)、inflection (屈折)、derivation (派生)、

はじめに

外国語を学習したことがあれば、誰でも語彙 (vocabulary) 習得に苦心した経験があると思われる。何かよい方法はないものかと、言語を研究対象としている言語学 (linguistics) にその答えを求めてみると、大別して三つのことがわかる。第一に、言語というものは形式と意味 (form and meaning) からなる構造を備えた記号体系 (sign system) であり、語 (word) のレベルではそれを「語形と語義」という。語の形式部門を担う言語学の領域を形態論 (morphology)、意味部門を担う領域を語彙意味論 (lexical-semantics) という。第二に、人間には習得した語を保管する能力が生得的に備わっていて、そこには、語の綴りや意味、統語上の制約等が音声と結びついたものとして体系的に保管されていく。この能力 (或いは、装置) が辞書 (mental lexicon) と呼ばれるものであり、辞書登録 (lexicalisation) を済ませた抽象概念は、語彙項目 (lexical item) として語彙に組み込まれていく。そして、最後に、語彙の習得というものは、抽象的な概念が辞書に登録されるまでのメカニズムを解明するだけでは何の解決にもならない。それは、むしろ、言語使用 (output) に関わる問題としてとらえるべきであるということがわかる。従って、語彙研究というものは、語の成立とその変

化の過程を通時的に記述することを主たる目的としつつ、共時的に用いられた言語データとしての語彙が、人間のどのような認知モデルと関わっているのかを普遍的にとらえていくことが必要になる。

言語学の下位部門には、また、実際の教育現場で語彙習得（広義の言語習得）の問題に取り組む研究分野がある¹⁾。この分野の研究者は、言語理論を教室に持ち込み、学習者の反応をデータ化する。そして、そのデータをもとに特定言語の指導方法を開発し、言語習得の新たな理論形成を目指している。こうした手法による語彙研究の成果はあまり多くは見られないが、教育工学がコンピュータの技術を駆使することで刺激源を増やし、学習者の記憶力を高めることに成功した例は少なくない²⁾。しかし、そうしたケースでも、心理学や生物学の理論と工学の技術を背景に成立する教授法が開発されていることに変わりはなく、純粋な意味で言語学の成功例とは言い難い。そこで、今回は言語外の知識の重要性を認める理論言語学 (theoretical linguistics) のモデルとして、認知言語学 (cognitive linguistics) の導入を試みることにする。

理論言語学というものは、その応用範囲が狭く、実用性が低い研究分野であると誤解される傾向にある。その誤解を払拭するために、ここでいくつか説明を加えておく必要を感じる。まず、いかなる応用言語学者も言語理論を背景にもち、それぞれの目標を達成するために用いる研究方法は、すべて理論言語学が論証してきたものに依拠しているという点である。この点において、応用言語学と理論言語学とは互いに分かち難い関係にあると言えよう。なぜなら、理論言語学の厳密な論理構成には、実際に応用可能であるということを立証する必要があり、応用言語学はその機能を果たしているからである。そして、理論言語学者が採用した哲学的判断（或いは、言語観）は、実用性という枠組みで評価されてこそ、真の価値が与えられるべきものだからである。次に、特定言語の教育を専門とする分野から、『通常の授業に、どれほど言語理論（即ち、言語の知識）を導入する必要があるか』という疑問を投げかけられることがある。確かに、初学者を教育している段階では、それほど言語の知識を色濃く出す必要がないかも知れない。しかし、一定の時間数を超えて同一の言語を継続的に学習してきた者は、対象言語の習熟度に応じてより多くの知識が必要になってくる。例えば、あるテキストの大意をつかもうとしていた時に、見たこともない語に遭遇したとしよう。その学習者は、通常、どのようにその語の意味をとらえようとするであろう。恐らく、文構造から品詞を特定し、前後に問題の語を言い換えた部分がないかどうかを探ることから始める。それを実現するには、少なくとも文法の知識と類義語の関係を把握している必要がある。また、その単語の内部構造から意味を読み取ろうとするかもしれない。これは、明らかに形態論の知識である。更には、同一の内容が肯定文から否定文（或いは、その逆）に置き換えられていたら、反意語・対義語の関係から意味を予測していくであろう。この他、音声学や音韻論の知識を用いれば語の性質を知ることができるし、言語外の知識から語の意味領域を推測することも可能となる。

以上のことから、本稿は、外国語の学習を目的とした語彙習得の問題は言語学が専門的に扱うべき性質のものであるという立場を取る。また、学習者が言語の知識を身につけるということに関して、決して無意味なことではないと考える。ただし、そこには少なくとも三つの前提条件がある。第一に、言語学が対象となる特定言語の語彙研究部門を整備し、他の部門（音声学・音韻論、統語論、意味論、談話分析、語用論）に整合性を保つ努力をし続けるということ。第二に、教員が授業に言語の知識を導入するための努力を惜しまぬということである。自己研鑽の無いところに教育は不毛だからである。最後に、教員間の情報共有が必要となる。すぐれた言語理論を導入し、教員が一定レベルの授業を保障しても、相互協力と情報交換が行われない限り、よりよい教育は期待できないからである。教育環境を教員が整備することも大切なのである。

多くの学習者は、語彙習得には目に見えない能力（記憶力）が強く影響しており、それが語彙習得能力の差として成績そのものに反映されると考えている。生得的な能力差が厳然と存在するのなら、学習者は対象となる言語に取り組む以前に自分の到達可能なレベルを必要以上に低く設定してしまう。学習意欲が減退すれば結果的に成績も下がり、ますます当該科目から遠ざかることになるであろう。このような悪循環を避けるためにも、教員は学習者が言語の知識を必要とする段階に到達したと判断した時点で、正しく言語の知識を与えるべきなのである。体系的に整備された言語の知識は、語彙の習得にとって非常に有意義なものになるに違いない。

しかし、その一方で、言語の知識をいつ与えるべきかという問題は、個々の学習者の理解と大きくかかわってくるものである。1人ひとりに個人プログラムを作成するためには、クラスサイズを小さくすることも重要になる。教員が理想的な授業を実現するためには、日々の改善に努めることも求められているのである。

1. 序論

本稿は、言語学がこれまで取り組んできた語彙研究の成果を概観し、言語学的な知識（広義には、「言語の知識」）が英語教育によい影響をもたらすということを論証するものである。また、本研究は形態論と語彙意味論を理論的な背景として行われる。形態論は語の内部構造（語形成）を担当するが、複合語や屈折語を記述する段階では、必要に応じて統語部門との境界に接近する可能性がある。語彙意味論は、特定の意味領域（semantic field）における語の意味的関連性（network）を記述するのに適しており、形態論が規定した語形と意味の關係に多くの示唆を含んでいる。加えて、語彙研究には、その成立過程を説明することにとどまらず、言語使用の問題にも取り組んでいく必要がある。従って、既に成立している語の使用者（人間）の特性を重要視するという点では、認知言語学的な視点を採用することになる。

言語の知識を教室に持ち込むことに対して、さまざまな方面から活発な議論が起こり得る。外国語教育の分野とは、その知識が「語彙習得に関わる範囲」に限定されていたとしても、

何を（どのような知識を）、いつ（どの時点で）、どこまで（どの程度）授業に導入するのかということが論点になることであろう。今回は初めての試みなので、語彙形成に関する知識を中心に（即ち、統語レベルへの介入を避けて）通常授業や定期試験で問われる程度の単語に関連付けて考察する予定である。対象は大学生なので、通常の授業には必ず言語の知識を導入するべきであるが、本研究に音韻規則や統語規則まで取り込むことは、（即ち、形態音韻論や形態統語論まで導入することには）あまり意味のあることとは思えない。また、語彙習得が個人レベルの努力によるものであると主張する経験主義者は、学習者の潜在的能力や、語彙が習得されるまで（即ち、概念形成のレベルから使用レベルに至るまで）の時間数と学習時間との相関関係を数値化することの方に、より関心を示すかもしれない。しかし、そうした実験から得られたデータが授業の向上に役立つと仮定しても、本研究は応用言語学的なアプローチには興味がない。更には、専門領域に関する語彙を習得さえしておけばよいという考え方がある。つまり、語学専門ではない学習者には言語の知識が必要ないという考えである。実務的な目的として、「専門領域の授業時間数を確保」しなければならないというような問題があれば検討の余地もあるが、いかなるテキストも言語で書かれている点に注目すれば、言語の知識が専門領域の妨げになるとは思えない。こうした議論はどれも非常に興味深いものであるが、本稿の目的は、学習者が理論言語学の知識を手にした時に、どのような効用があるかを考察するものなので、そうした課題は英語教育の専門家に譲るものとする。

本研究の意義を十分に理解し、「平成十四年度特別研究」の対象として承認してくれた嘉悦学園には、心より感謝を述べたい。認知言語学理論の重要な情報を、直接的・間接的に提供してくださった池上嘉彦先生に対しては、どれほど言葉を尽くしても感謝しきれない。本稿における例文の多くは、理論言語学講座で先生が用いたものがあつたからこそ得ることができた。夏期休暇期間中にもかかわらず、語彙の意味領域に関する調査に協力してくれた Cambridge、Nottingham、Edinburgh 各大学の学生たちにも、この場を借りて感謝したい。最後になるが、語彙を中心とした言語研究の経験がほとんどなかった私に、その大切さと喜びを見出す道を示してくださった Michael McCarthy 先生に、心より感謝の気持ちを伝えたい。語学教師としての経験も豊富な先生の講義を受けたことにより、実践的な教育現場に言語理論を持ち込むことの意義を教えていただくことができたと確信している。

II. 理論的背景

伝統的に、言語学は「言語は記号の体系であり、その記号は形式と意味からなる」と考えている。単純な音 (sound level) から意味伝達 (communication level) に至るまで、言語の形態は一連の言語レベルに区分されており、それぞれのレベルが物理的な意味での量的階層関係を形成し、隣接する下位レベルの統語配列によって実現すると考えられているのである。語の成立過程は、発音可能な音の素性を組み合わせることにより、まず指示対象を名づけることから始まる。これは言語の最も原始的な機能であるとともに、人間が日常的に事物

を判別していく過程において、非常に重要な作業となる。文字は、後になって音の素性を実現するために配列されたものとして考えることができる。指示対象に結びつけられた音は、初めから対象となるものを直接的に示すほどには十分な意味素性を持たず、人間の記憶装置である脳内に蓄積され、始めて語としての地位を獲得する。人間が脳内に持つ辞書に登録された語は、その形と指示対象の間にある種の連想関係を築き上げ、言語経験に応じて正しく使用されていくのである。

1. 記号としての語

20 世紀の構造言語学者は、他の事象・現象と同様、言語を形式と意味からなる記号の体系としてとらえている。この記号論的視点で語をとらえなおすと、そこには語形と語義という関係が成立する。言語哲学者のパーズは、記号として現れる語形とその記号が表す指示対象（語義）との間には、指標³⁾・類像・象徴という三種類の連想関係が成立することを示唆している。これを具体的に図式化したものが、下の Figure 1. である。

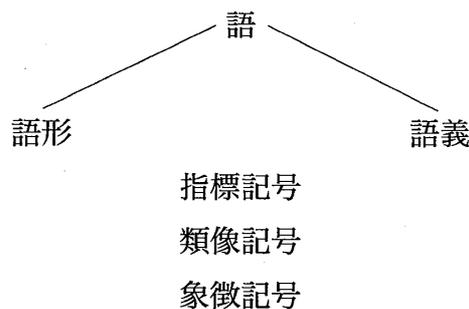


Figure 1. パースによる記号の分類

(1) 指標記号 (Indexical sign)

「近接性」に基づく連想関係であり、既に存在する事物（記号）によって指示対象を喚起する方法。時間的・空間的な近接性や、原因と結果などの連想関係が喚喩 (metonymy) として現れたものとして考えることができる。例えば、ある特定の話し方をする人がいれば、我々はそこに個人的な特徴（性別、年齢、出身、職業など）を読み取るであろうし、医師が患者の外見（例えば、皮膚の表面に見られる「発疹」など）から治療方法を定めることも、近接性に基づく「意味づけの営み」なのである。また、指標記号が表す因果関係は、部分と全体の関係を示す提喩 (synecdoche) として現れることもある。

- ① a. 花見をする（さくら：上位語が語彙項目の中から桜だけを抽出する）
 b. 私にもボルドーをたのむ（ワイン：産地が産物を表す）
 c. 漱石は読みましたか（作品：著者名が作品を示す）

a. に見られる「花」という語は、さまざまな種類の花（例えば、バラやひまわり）のことを指し示すことはない。標準的な日本人であれば、春に咲く桜の花を楽しむことを連想するであろう。時には、その延長上で「宴」を連想することもできる。また、b. の「ボルドー」はフランスの地名であるが、そこで生産されるワインの評判が高いことから、高級感のあるぶどう酒を連想させる。そして、c. は夏目漱石自身のことというよりも、彼が書いた作品を指し示している。どの例も、ある別な記号を指標として（経由して）目的の意味に到達している。こうした記号には、概念レベルで視点の移動が含意されていることに注目したい。

この他、指示代名詞として現れるような直示表現 (deixis)⁴⁾ が指標記号として扱われることがある。その場合には、会話に参与している一人称と二人称とが、交互に話者として直示表現を用いることになる。

(2) 類像記号 (iconic sign)

「類似性⁵⁾」に基づいた連想関係で、既に概念化されている（即ち、既知の）記号の一特性を焦点化し、そこに指示対象を投影 (mapping) することで意味拡張を行う方法。これは隠喩 (metaphor) に代表されるものであるが、文学の世界で文装飾の技術とされるものと区別するために「メタファー」と表記する。メタファーは日常生活に浸透しているため、ほとんど無意識のうちにこの連想関係から意味の拡張をおこなっている例が少なくない。

- ② a. 君は花だ (とても美しい女性)
 b. 月見そば (卵を月に見立てた蕎麦)
 c. あの人は、そよ風のようだ (爽やかな人)

「～に見立てたもの」という基本モデルに組み込むと、それぞれの意味が連想できる。a. における女性は、「花」の持つ美しさになぞらえられており、b. の卵は注文した蕎麦に浮かぶ「月」に見立てられている。c. は、その人のすがすがしい「様子 (外見)」が目映るであろう。厳密には直喩表現であるが、ここではその違いを強調するよりも、意味の広がり注目したい。

(3) 象徴記号 (symbolic sign)

以上、二種類の連想関係が言語使用者の意図を含む（動機付けられている）のに対し、象徴記号に有契性 (motivation) は見られない。つまり、語形と語義の間には社会的・文化的な取り決めによる「恣意的な関係」が成立していると考えられているものである。以下の例では、スラッシュが概念レベルに存在する記号であることを示している。

- ③ a. /いす/に対する椅子
 b. /信号の青色/に対する「進め」の意味
 c. /¥/という記号が示す日本円

a. は、適度な高さや背もたれ、座り心地のよさを満足させるという機能が構造を規定している例である。b. は、日常生活の一部として浸透しているため、当然過ぎて象徴的であることさえも見落としそうになるであろう。典型的な記号c. は、他のどの国の通貨でもない、「日本円」を連想させる強い連想関係が見てとれるであろう。

この三種類の連想関係から、人間の言語習得の段階を見出すことも可能である。母国語を習得する前の（或いは、習得段階にある）子供には、指示対象を指し示すという行動が頻繁に見られる。この段階で発せられる音は、指示対象を表している（即ち、意味を表している）とは判断できない。やがて、子供は語の意味や外観から名づけられた音を模倣するようになり、最終的には、語に備わった意味を理解した上で、正確な音を発するようになる。子供の成長段階と語の内部構造の連想関係は、下の Table 1. のように表すことができる。

行 動	発音 (発話)	連想関係
指で対象物を示す	×*+△?	indexical sign
↓	↓	↓
音を模倣する	ブーブー/ウーウー	iconic sign
↓	↓	↓
意味を理解し、正確に発音する	くるま・じどうしゃ	symbolic sign

Table 1. 車の例に見る子供の成長と連想関係

2. Morphology : 形態論

語の形態、及び、その内部構造を分析する言語学の研究分野を形態論という。形態論の研究対象が語であるということには疑いの余地がない。しかし、実際にはその名称が示すように、語そのものを形態論は直接的に記述しようとはせず、概念レベルでいくつかの層を設け、そこに形態、形態素を位置づけ、間接的に語を記述した上で、さらに上位の概念として語彙を設定している。

これまで、語にはいくつかの定義が与えられているが、語彙研究に触れたことのない読者のために、順を追って説明する。なぜなら、多くの場合、語彙は「語意」と混同され、厳密に定義されないまま用いられるからである。

(1) 語の定義

英語で何かを書き表わす場合には、各語の両側にスペースを確保しなければならない。この特性を利用すると「語とは両側をスペースに囲まれたもの」ということになる。この定義を採用すると、特別な知識がなくても視覚のみに頼ることで語を探しあてることが可能になる。この点において、表記の規則から得た定義は最も実用性が高い⁶⁾。しかし、ハイフネーションで結び付けられた語の多くは、複合語が形成される過程にあることが予測されるため、直感的に一語であると断定することは困難である。

- ① a. an apple-polisher (ゴマすり：人の顔色をうかがう人間)
 b. a punch-drunker (パンチドランカー：ボクシング選手のスポーツ後遺症)
 c. the grey-zone (灰色の部分：どちらとも言いがたい、曖昧な部分)

次に、「すべての文字には音があり、それぞれの音が音韻規則にしたがって構成されると意味が結びついて語になる」という定義の妥当性について考える。この定義では、強勢に関する音韻規則⁷⁾とともに形態論の規則を採用することになるので、その信頼性はより一層高くなる。下の②は発音上の強勢部分が斜字体で表わされているので、左側が「名詞句」で右側は「複合語」であることが判別できる。また、形態論の規則にそって語の緊密性⁸⁾が保たれているかどうかを確かめてみれば、句と語を区別するのはそれほど困難なことではない。

しかし、文脈のない状況において、音韻規則から出発した定義は句と語を判別することができないことがある。事実、a. と c. の例では句と語が同一形態をとるため、両者の間に違いを見出すのは困難である。更に、学校文法では、b. の複合語を名詞句として扱う。なぜなら、その強勢部分が「動名詞形容詞的用法前置修飾」として扱われるからである。

- ② a. a dark room (暗い部屋) / a *dark* room (暗室)
 b. a sleeping baby (眠っている赤ちゃん) / a *sleeping* bag (寝袋)
 c. an English teacher (英国人の先生) / an *English* teacher (英語の先生)

「語は最小の意味単位である」という定義はどうであろうか。即ち、語というものを一對の形態と意味から成る最も単純な記号として扱う考え方である。しかし、この場合にもいくつか問題が残る。まず、言語の使用者である人間が、認知したすべての意味(厳密には、「意義素」と同数の語を創り上げてきたとは考えられない。人間の限られた記憶力からすると、それはかなりの負担になるはずである。むしろ、まず人間は一定数の基本的な語を辞書登録し、それらを組み合わせることや、部分的形態変化(変形)によって語数を増やしてきたものと考えべきであろう。次に、語形成の歴史上、高い生産性(productivity)を誇る接辞(affix)の扱いが問題となる。屈折(inflexion)や派生(derivation)には語基(base)と結合する

接辞が必要であり、単独で意味を担うことから辞書にも掲載されている。しかし、接辞はその名称が示すように、語の要素（一部分）ではあっても語として認められることはない。

そこで、構造言語学の研究者は (c.f. Broomfield)、語の内部に形態素 (morpheme)、意義素 (sememe)、音素 (phoneme) という素性の構造を認めた。更に、その下位区分としての形態 (morph)、意義 (seme)、音 (phone) という概念構造を想定し、それぞれに形式 (form)、意味 (meaning)、音 (sound) の各部門を担当させた。この構造を「語彙体系のモデル」であるという仮説をたてて、言語が使用されるまでの過程を説明していくのである。まず最下位の区分(仮想モデル)で結合した三つの要素は上位構造に昇格して素性をもつ。同様の手続きを踏んで各素性を統合させると語彙素 (lexeme) となる。この段階ではまだ抽象概念である語彙素は、人間の概念構造にある辞書 (mental lexicon) に登録され (lexicalisation)、辞書項目 (lexical item)⁹⁾ として記憶される。その辞書項目は、やはり概念構造に組み込まれた意味の場 (semantic field) において構造を与えられて、最終的には使用のレベルにおいて語 (word) として表出するである。情報量に応じ、語は句となり、文を形成していくというのが、構造言語学の理論基盤なのである。

概念構造に組み込まれた辞書項目の総体は、語彙 (vocabulary) という更に上位の概念で統括されている¹⁰⁾。従って、語 (a word) というものは単語と同義ではなく、「抽象概念が言語使用によって具現化された意味の最小単位」なのである。

(2) 語と形態素

語を内部構造で分類すると、単独の形態素からなるものと、複数の形態素からなるものがある。また、語を文法機能で分類すると、機能範疇 (functional category) に属するものと、語彙範疇 (lexical category) に属するものがある。機能範疇には、冠詞、be 動詞、助動詞、接続詞、一部の前置詞と副詞¹¹⁾ が属し、他の要素との結合には文法上の制約がかかり、単独ではほとんど意味をなさない。一方、語彙範疇には、名詞、動詞、形容詞、副詞¹²⁾ が属し、他の要素との結合には意味上の制約がかかる。更には、統語論的な視点から、多くの語と「閉じた関係」で結合する結合形態素 (bound morpheme) と、他の語と「開かれた関係」で結合する自由形態素 (free morpheme) という分類も可能である。以上のことから形態素を一般化すると、語彙範疇の形態素を機能範疇の形態素がつなぎ合わせることにより、句や文が形成されると考えられる。それぞれを下の例で比較し、結合の様子をみてみたい。

- ① a. an (不定冠詞)
- b. could (助動詞)
- c. of (前置詞)

①はどれも、機能範疇に属する語の例である。a. は可算名詞の単数であれば、いかなる語と

も結合の可能性もある。数を意味する場合には形容詞としての機能を果たすので、自由形態素として扱われることもある。b. は助動詞なので、原形不定詞であればいかなる動詞も後続させることができる。c. は前後に名詞句を伴い、所有関係や物理的な（近）距離を意味する。また、be 動詞に後続し、名詞句を伴って形容詞句を形成することも可能である。これらの例はどれも単独では意味を成さず、文法的な機能を果たすものである。

- ② a. fortune → fortunes / fortunate / *unfortunate* / *fortunately* / *unfortunately*
 b. put → puts / put (past) / put (past participle) / putting
 c. sing → sings / sang / sung / singing / singer
 d. easy → easier / easiest

②はどれも、語彙範疇に属する語の例である。それぞれの語は屈折や派生をなす接辞を伴うことにより、一方では文法機能を変化させ、もう一方では意味を拡張させている。これらの語をすべて一語として数えることは、人間が生得的にもつ記憶の許容範囲からも現実的ではない。では、人間はどのように語彙範疇に属している語を記憶していくのであろう。

一般的には、屈折や派生をなす接辞を一時的に形態という概念レベルで短期的に辞書登録しておき、語形成のもととなる語基 (base) を形態素として概念化する過程で、a. b. c. d. 二十の形態を FORTUNE/ PUT/ SING/ EASY という4つの語彙素として辞書に登録する。辞書の中で短期的に登録された接辞と語彙素は緊密性を高め、意味論的、語用論な制約がかかった状況の中、的確な語として使用されるのを待つのである。また、上の例の語彙素はどれも他の要素との組み合わせにより、複合語を構成することができる自由形態素¹³⁾であるということもできる。

(3) Word-formation : 語形成

語はさまざまな過程を経て形成され、その意味は特定の範囲で広がりをもつ。そこには「意味の場」という概念が作用し、その範囲に区分される語に意味的な関連をもたらす。語は、他の語との関係によってのみ意味のつながり (network) を築き上げるのではなく、個々の語に内包された意味がその使用域を「意味の場」として規定しているということも忘れてはならない。

人に固有の名前があるように、すべての事物に名称があるということは、複数の対象に同一名称を与えるよりも誤解が少ない。しかし、すべての事物を語彙素として辞書登録することになると、語の数は膨大なものになってしまう。この問題を、言語の創造性 (productivity) はどのように解決してきたのであろうか。

(3) - 1. 新造語 (Coinage and Proper noun)

何らかの形で有名になった名詞を別の目的に転用した例。商品名などに多く見られるが、日本語における「ホチキス」や「サランラップ」ほど定着していない。

- ① a. nylon (a kind of artificial material, used for making clothes) (西光編: 1997, P. 64)
 b. ezWEB (a network system easily accessible from a certain kind of mobile phone)
 c. Hoover (an electric cleaner)

(3) - 2. 借用語 (Borrowing)

もともと英語になかった語を海外から輸入し、そのままの形で取り入れてしまったもの。音声的に響きがよいから受け入れられたものばかりではなく、さまざまな理由で持ち込まれた後、語としての地位を獲得したものもある。日本語の例でも、カステラ、パン、ハンカチ、しゃぼん (玉) のように、すっかり定着したものがある一方、ワイシャツ (white shirt) やミシン (sewing machine) のように、聴覚的にとらえそこなったものや、一部分だけとらえたものが残っていることも注目に値する。

- ② a. a duvet¹⁴⁾ (French: a continental quilt)
 b. a hooligan¹⁵⁾ (Irish: a rough, lawless youth) (McCarthy: 1994, P. 30)
 c. karaoke (Japanese: a machine which plays only the music of popular songs)

(3) - 3. 逆形成 (Backformation)

ある品詞として辞書登録されたものが、別の品詞として用いられるケース。ほとんどの場合、その形態を変えずに転用される。ここでは、名詞が動詞に転用された例を取り上げる。

- ③ a. to wallpaper (wallpaper という名詞より: 壁紙を貼る)
 b. to air-condition (air-conditioner という名詞より: 冷暖房や換気をする)
 c. to baby-sit (baby-sitter という名詞より: 乳幼児や子供の世話をする)

(3) - 4. 短縮 (Clipping)

文字通りある語の部分的な省略である。理論的には、前方の省略、中間部分の省略、後方の省略、そして、前後を省略するものに分類される。日本語には中間部分を省略する造語が多く見られるが、英語の場合、語基が位置しやすい部分を省略することに困難が生じるためか、その例がほとんど見られない。

- ④ a. bus (omnibus)

- b. fridge (refrigerator : 綴りに変化が起こる)
- c. vege (vegetable)

(3) - 5. 頭字語 (Acronym)

頭文字だけを抽出して発音したものが、まるで一語を形成しているかのように聞こえるものの例で、頭文字をアルファベットとしてそのまま発音するもの (e.g. BBC, CD, CIA, UCLA) とは区別される。

- ⑤ a. LASER¹⁶⁾
- b. UNICEF (United Nations International Children's Emergency Fund)
- c. ASEAN (Association of Southeast Asian Nations)

(3) - 6. 混成 (Blending)

複数の語の一部ずつを混ぜ合わせて作り上げた語。通常、ある語の前方部分と別の語の後方部分が結合している。特に c. は、alcohol の中毒状態を表す alcoholic の後方部分が work (仕事) に結合し、「仕事人間」という意味を創り出している。本来、-ic だけが接辞であるのに、-holic に「中毒症状」の意味を持たせている点が注目になるものである。-holic の混成語には、この他、chocoholic や cheese-holic などがある。

- ⑥ a. smog (smoke and fog)
- b. brunch (late breakfast from breakfast and lunch)
- c. workaholic (a person who finds it difficult to stop working in order to do other things)

(4) 複合語 (Compound)

複合語とは、複数の語の合成によって形成される語のことである。従って、その生成過程において二語以上であっても、語として扱うものである。複合語が辞書に登録され、一般的になっていく過程では、その表記方法に違いが現れる。矢印は、その生成過程の順を示している。

- ① a. separated (e.g. starting point, hand writing)
- b. hyphenated (e.g. starting-point, fly-fishing)
- c. juxtaposed (e.g. startingpoint, dressmaking)



STARTINGPOINT の例には、この複合語が独立した語の合成であったもの (a.) から、ハ

イフンで結び付けられる過程 (b.) を経て、現在に至る様子 (c.) が反映されている。一方、同種の形態素が複合語を形成している場合であっても (どれも「名詞+動詞 ing」)、その使用頻度や言い回しの感覚により、「段階的に」定着していくものであるということが見てとれる。(独立した語の複合は、句の様相が色濃く残されている点に注意が必要である)

複合語の内部構造を「複合名詞」の例で見る。一般的な複合名詞の場合、修飾部分 (modifier) が主要部 (head) を形容する関係で成り立っている。今、修飾部分を M、主要部を H と表記した場合、以下の四通りの組み合わせが可能である。

- ② a. MH 型
b. HM 型
c. MM 型
d. HH 型

これらを大別すると、一方の意味や文法機能が他方を支配する関係と、両者が同格関係 (appositional) にあるものがある。上の例では a. と b. が支配関係にあり、c. と d. が同格関係にある。支配関係の複合語の場合、多くは後続する主要部に品詞や数という文法機能や、意味範疇 (semantic category) が依存しており、他方、修飾部分は主要部の性質や目的を表すものとなる。多くの言語と同様、英語も原則的に修飾語句は被修飾語の前に置かれるので (右側主要部の規則)、a. の例に比べて b. の例がそれほど多くは見られない。同格関係の複合語には、どちらも修飾部分からなるもの (exocentric compound) と、どちらも主要部からなるもの (dvandva) がある。

細分化された複合語は、さまざまな品詞として辞書登録されている。Table 2. から、英語には日本語ほど複合動詞が多くないことが見て取れる。恐らく、日本語で重ね合わされた動詞の意味を、英語では前置詞や副詞との統語関係 (構文) で任うためである。

	Compound Noun	Compound Adjectives	Compound Verb	Compound Preposition
MH 型	wheelchair hair-band	frozen-dry barrier-free	behold input	
HM 型				without
MM 型	scarecrow kidnap	easy-going hard-up		below
HH 型		long-standing black-and-white		within onto

Table 2. 複合語の型と品詞別の例

(5) 接辞 (Affix)

接辞には、理論上、接頭辞 (prefix)、接尾辞 (suffix)、接中辞 (infix) があるが、英語に接中辞の例はほとんど見られない。概して接辞は結束形態素であり、機能面で分類すると、語基に統語規則を反映させる屈折 (derivation) と、意味変化や品詞の転換をもたらす派生 (inflection) に区別される。

屈折には、可算名詞の複数形 (-s, -es, -ies)、三人称単数の主語を持つ文が直説法現在時制の場合に起こる述語動詞の語形変化 (-s, -es, -ies)、過去時制を表す述語動詞の語形変化 (-ed, was/ were を含め、不規則に変化する一般動詞の過去形)、進行相を表す現在分詞 (be 動詞とともに現れる動詞の-ing)、受動態・完了相を表す過去分詞 (be 動詞 / have 動詞とともに現れる-ed, 原型から変化しない (同形) を含む不規則変化の過去分詞)、形容詞の比較級・最上級、原形不定詞等がある。

同種の文法規則を反映する際に、結びつく語基の形態によって接辞が変化する場合がある。これを異形態 (allomorph) と呼ぶ。例えば、可算名詞の複数を現す接辞には、少なくとも三種類の発音方法がある。しかし、これらを三つの形態素として数えることは、「記憶」という観点からも合理的な手続きとは言えない。これらを、同一の規則を反映させる異形態として扱うことで、我々は記憶の負担を軽減するのである¹⁷⁾。

一方、派生は語基に結合して意味を変えるものや、品詞転換をもたらすもののことである。多くの場合、派生語を生成する接辞には、それぞれの意味があると言われている。McCarthy (1994) から一部抜粋した形態素をもとに、下の表は作られている。

Prefix			Suffix		
Morpheme	Meaning	Example	Morpheme	Meaning	Example
anti-	against	anti-aging	-ment	noun	improvement
bi-	two, twice	bilabial	-ity	noun	sincerity
ex-	out of/former	ex-husband	-hood	abstract noun	neighborhood
micro-	small	microchip	-ship	abstract noun	relationship
multi-	many	multi-dimension	-al	adjectives	pentagonal
over-	too much	overwhelming	-ful	adjectives	powerful
post-	after	post-structuralism	-ify	verb	simplify
pseudo-	false	pseudo-classics	-ize	verb	cognize
sub-	under	substantial	-ly	adverb	patiently

Table3. 接頭辞・接尾辞の例

(McCarthy : 1994, P. 16. 18)

接辞にも、複合語同様、右側主要部の規則は適用される。右側主要部の規則から、接尾辞が派生語全体の品詞を支配していることを下の図は表している。

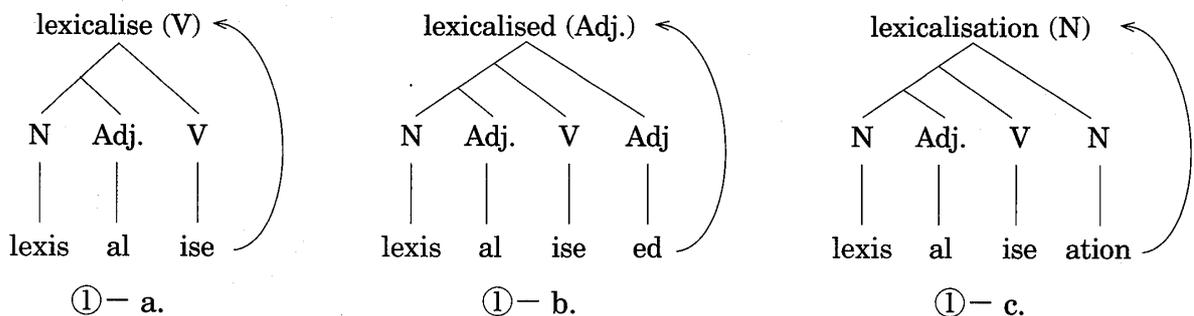


Figure 2. 接辞による派生語（右側主要部の規則）

①の a. ~ c. はどれも、接尾辞の合成による派生語である。右側主要部の規則によって、最後部にある接辞（a. の ise (V)、b. の ed (Adj.)、c. の ation(N)）の品詞が、派生語全体の品詞に反映されるということが確認できる。どの例でも最後尾の品詞が繰り上がり（percolate）という現象を引起していると考える言語理論もある。

一方、接頭辞が品詞を決定する例を、右側主要部の規則の反例として挙げておく。

- ② a. en (large → enlarge、rich → enrich、bed → embed : 形容詞・名詞 → 動詞)
- b. a (sleep → asleep : 動詞 → 形容詞・副詞) (松本他 : 1997, P. 17)
- c. de (caffeine → de-caffeine : 名詞・形容詞 → 他動詞)

3. Lexical-Semantics : 語彙意味論

伝統的な語彙意味論では、人間には生得的に感覚関係（sense relation）というものが形成されているため、我々はそれを基準に意味をとらえていると考えた。語の意味は、互いに複雑な関係を保ちつつ安定と変化を繰り返し、抽象概念としての語彙体系を構築していると考えたのである。ここでは、この原理をもとにして、語の三要素（意義素、形態素、音素）を分類することから始める。

	A	B	C	D	E	F	G	H
意義素	○	○	○	×	○	×	×	×
形態素	○	○	×	○	×	○	×	×
音素	○	×	○	○	×	×	○	×

Table 4. 語の三要素と関連性

語の三要素がすべて共有されているというのは単複同形の名詞 (eg. fish, sheep) のような例であるが、これらは異形態の一種とみなす。逆に、どの要素も共有していないということは、全く別の語としてみなされる。従って、A と H は議論の対象外となる。

屈接語や派生語には、形態素と意義素が結びついているのに音素が異なる例がある。一例を挙げると、原形不定詞の read (/ri:d/) とその過去・過去分詞形 read (/red/)、名詞の increase と動詞の increase などが B に含まれる。

意義素と音素が結びついているにもかかわらず、表記の段階で異なる形態素になった語や、逆に、意義素と音素が異なるにもかかわらず、形態素を共有している語というものは存在しない。従って、C と F も議論の対象外となる。

D を大別すると、語形成の段階で偶発的に一致したものと、多義語に分類される。前者は「横たわる (lie)」の過去形と「横にする (lay)」の原形不定詞や、「横たわる (lie)」と「嘘をつく (lie)」の原形不定詞のような例で、どちらにも関連性は認められない。

以上より、D の多義語と E の同義語・類義語、そして G の同音語を中心に例証する。

(1) Polysemy (多義語)

一つの形態素に複数の意義素が結合したものを多義語という。多義語を大別すると、語の内部構造である意義素が「近接関係」、「類像関係」にあるものや、統語レベルで多義が発生するものがある。従って、多義の問題は概念レベルで意味が結合するもの (metonymy/metaphor) と、構文の意味が関るものにと分類する必要がある。

- ① a. foot (人体の一部 → より下方に位置するもの → e.g. foot notes, the foot of mountain)
 b. -1 to drive the car
 -2 to clean the car
 -3 to wash the car
 -4 to repair the car

(高野：2002, P. 46)

(2) Antonym (反意語・対義語)

- ② a. life ⇔ death
 b. opaque ⇔ transparent
 c. come ⇔ go

E と H の性質を兼ね備えたこの反意関係では、 $A \neq B$ の関係が必ずしも $A = \text{not } B$ や $\text{not } A = B$ にはならないということに注意が必要となる。a. にはほぼ完全な対立関係が成立しているのに対し、b. には程度の差、c. には主体的な視点の移動が含意されている。b. 「段階的

な意味」を下の③で、c. の「主体性」を下の③で説明してみよう。

- ③ a. She is not happy. (彼女は幸福であるとはいえない/とんでもない、彼女は不幸である)
- b. She is not very happy. (彼女はそれほど幸福ではない)
- c. She is unhappy. (彼女は不幸だ)

a. の例では、アクセントが not に置かれた場合と happy におかれた場合とで、少なくとも、二通りの意味に解釈ができる。それに対し、c. の意味は「不幸」であるということが主なる意味内容となる。その中間をなすのが b. ということになる。

- ④ a. 「おいで」に対する「今行く」
- b. “Come here.” に対する “I’m coming.”

a. の日本語では、話者の行為をあくまでも主体的にとらえることによって「行く」という行為動詞で表しているのに対し、b. の英語は、発話に先行する意味内容を参照点とし、そこからの視点で「来る」という行為動詞を用いていると考えられる。比較的敬語表現の豊富な日本語と、それほどでもないと思われがちな英語の間で、このような対立が生じることは非常に興味深い事実である。

この他、包含関係（逆に、従属関係）を表す Hyponymy と、同列関係を表す Coordination が成立する。これは、生物の分類では「種・属・類・目」などの用語で表される階層関係のことで、上下と左右の関係である。動植物をおおまかに分類した下の Figure 3. で説明してみよう。

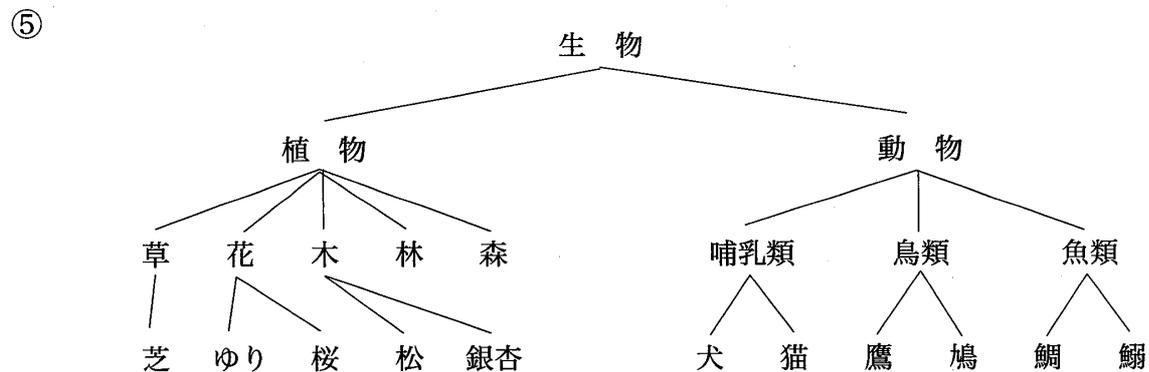


Figure 3. 動植物の分類

今、「植物」を中心に全体をとらえてみると、より上位に位置する「生物」は上位後 (hyperonym)、下位に属している「草」、「花」、「木」、「林」、「森」は下位語 (hyponym) で

ある。そして、水平上に位置する「動物」とは同列関係 (coordination) ということになる。

語彙習得の観点から、「哺乳類 (mammal/ mammalian)」は例外として、中間よりやや下位に位置する「草」、「花」、「木」、「林」、「森」、「鳥」、「魚」は、比較的早い時期に習得されるのに対し、最上位の「生物 (forms of life)」や、最下位の「松 (pine tree)」や「銀杏 (ginkgo tree)」の習得は遅い。その理由として考えられるのは、これら早期習得される語には自由形態素が多く、かなり自由度の高い状況で合成語を作りうる潜在的な可能性を秘めているからである。また、同等関係に位置しているにもかかわらず、「犬」、「猫」より「鷹 (hawk)」や「鯛 (bream)」の習得時期が遅いと感じるのは、人間の日常生活により近い存在のもの、環境によってはほとんど縁の無いものとの差ではないかと考えられる¹⁸⁾。

(3) Synonymy (同義語・類義語)

音素と形態素を共有せず、同一の意味領域 (semantic field) の中で意義素が共有されているもの。以下の例は、Rudzka, et. al (1981) より抜粋されたものである。

- ⑥ a. Opinion of oneself: conceit, pride, self-esteem, vanity
- b. Being attractive: beautiful, lovely, pretty, charming, attractive, good-looking
- c. Counting up the worth: assess, estimate, evaluate, value, rate

Rudzka, et. al. (ibid) は形態の異なる複数の語を単純には同義語とせず、語法上の差を使用レベルで説明している。その方法として採用されているのは、ある意味のまとまりをもつ語のデータを縦軸、その素性を横軸に併記するマトリックス (matrix) である。特定の語が併記された素性に合致すると、そのグリッド (grid) に+のマークが記されるという仕組みで、問題となる語に素性が見られない場合には、グリッドが空欄のままになる。素性の有無を見分ける過程において、母語話者の間でさえ微妙な差が生じ、簡単には判断がつかない時がある。そうした場合には、グリッドに (+) がマークされる。

素性分析 (componential analysis) は構成性の原理 (the Principle of Compositionality) に基づく意味規定の方法であるため、どれだけの素性を併記する必要があるか、素性には優先順位があるのか、どれだけの素性を持つものが意味的に典型 (prototype) となるのかという点において、明確な基準をもたない。(高野:2002) しかし、その一方で、母語話者から得る直感を分析する上では、ある程度その効力を発揮する。上の c. を例に取り上げ、その手順を見ていく。

		count up the worth of	implies precise analysis	implies temporary judgement	always implies positive judgement by placing or as if by placing on a numerical scale
assess	+	+			
estimate	+		+		
evaluate	+				
rate	+			+	
value	+				+

(Rudzka, et. al : 1981, p. 7)

すべての語が「価値を判断する」という素性を共有していることから、これらの語は同じ意味領域に属していることが判断できる。微妙な意味の差は、語が相互に他の素性を共有していないことから、比較的、簡単に判別できるようにも思える。次に Rudzka, et. al. (ibid) は、語がどのような構文に現れるのかを一般化している。

…All the above verbs, except **evaluate**, can appear in expressions of the type, **to ... sth at**.

(Rudzka, et. al : 1981, p. 7)

ここまでは一般的な辞書でも分類可能な範囲であるが、更に、語結束 (collocation) の可能性による分類を試みている点は注目に値するものである。

	sb's income for tax purposes	damages	the cost of sth (at)	the importance of sth	the evidence	sb's performance	sb's contribution to the debate	sb's ability	sb as very competent, highly capable, highly gifted	sb's property (at)	sb as a leader	sb's advice
assess	+	+	+	+	(+)	+	+	+				
estimate		+	+	+								
evaluate				+	+	+	+					
rate				(+)		+	(+)	+		+		
value						+	+		+	+	+	+

(Rudzka, et. al : 1981, p. 8)

Rudzka, et. al. (ibid) は、これらの素性がすべてではないとしながらも、これだけの素性があれば、どのような状況でそれぞれの語を使用したらよいかを判断する助けになると主張している。これは、語彙分類集 (thesaurus) と等価値の情報源となり得るものであり、中級以上の学習者には必ず求められる分類法である。

(4) Homonymy (同音異義語)

形態素と音素は共有するが、意義素を共有していないもので、「名づけ」の過程において、恣意的に結び付いた語形と語義であると考えられる。多義語との区別は、個々の語が独立して辞書に登録されているかどうかという点である。多義語に対して「単義語」と呼ぶこともある。

- ⑦ a. bank (銀行／土手)
- b. bat (バット／こうもり)
- c. can (カン (Am. E) / 助動詞)

(5) Homophone (同音語)

音素のみを共有し、意義素と形態素の共有を意味しないもの。c. はオーストラリアのアクセントで発生する例であるが、厳密には、前者 (to die) は句として扱うべきものである。

- ⑧ a. pear (梨) ⇔ pair (一対)
- b. bury (埋葬) ⇔ berry (イチゴ)
- c. to die (死ぬこと・死ぬため) ⇔ today (今日)

4. 認知言語学的視点

意味の研究が進むにつれ、特定の語が表す意味の範囲を設定することが必要になってきた。一方で、メタファーの助けにより、意味は拡張し続けているため、伝統的な言語学の研究成果だけでその領域を示すことにはさまざまな障害が出てきた。この障害に対し、認知言語学は、人間の認知がイメージスキーマとして表わされることを示唆している。つまり、ある形態には典型的な意味と、その周辺をなす意味とがあり、そこに何らかの関連性を持って集められた要素には、共通する意味にたどりつく痕跡が残されており、それは認知の主体である人間が焦点化した語 (或いは、その語が示そうとする「意味」) を中心に、放射状の構造 (radial construction) をなしているということである。それはちょうど、蜘蛛の巣が中心から外側に向けて一定の間隔で築き上げられていくように、互いに結びつき合いながら広がりをもつと同じ様子である。そして、この意味の構造は、中心からは限りなく遠いどこかで、我々が意識していないような、別の意味と結びついているのである。ただひとつ、この意味の広が

りと蜘蛛の巣と間に違いがあるとしたら、表記上の制約の中では困難であるとしても、三次元の方向にまで広がるという点である。その形は、まるで、人間の脳の神経が張りめぐらすネットワークの様相を呈しているのである。

意味の構造は、人間の身体的な特長によっても規定されている。ほとんどの情報を視覚的にとらえる人間は、「視点の移動」にしたがって外界を意味付けていく。そのため、日常的な言語使用に浸透しているメタファーとして「見上げる」、「見下げた」という表現を形成した。メタファーによって規定された概念により、我々は、上方向に対して「重要性」や「有難み」を、下方向に対しては「軽視」、「優越」の感覚を抱くようになる。それが言語の体系に影響を及ぼし、感覚関係 (sense relation) を表す場合に「上位語」や「下位語」という形で顕現すると考えられる。同様に、視界に入らない方向に対しては「危険」や「恐怖」が伴い、精神的に疲れた状況では「肩を落とす」。自分より優れた人間を「見上げ」、常に「上昇志向」を持って生きているのである。

「言語は記号の体系である」という説明から始まったが、その記号が示す現実世界は言語によってのみ実現されるものである。そこに表わされる意味の広がりや、言語使用者である人間が想像できる限りにおいて拡張し続ける。従って、たとえどんなに遠くにある意味も、時間をかけてゆっくりと手繰り寄せれば、必ず納得のいく形での説明がつき、理解できるはずのものなのである。

Ⅲ. 授業における「言語の知識」

0. 授業の背景

0-1. 教育環境の設定

対象となる特定言語は英語に限られ、学習者は日本人大学生とする。対象となる学生の専門科目は英語ではなく、年齢は十八歳から二十歳（大学1・2年生）までとする。英語の基礎学力が高い者の数はそれほど多くはないが、平均的な潜在能力はある。クラスのサイズは六人構成の班が四つの二十四名で、教室の机はどのようにも置き換えることが可能になっている。この他、各教室には英英辞典、語彙分類集、複数言語に渡る辞書のほか、授業に必要なアイテムが揃っている。

学内のネットワークへは無線ランでアクセスが可能であり、すべての学生はラップトップ型 PC を所有している。この環境下にあつて、学生は教員が配信する情報を（例えば、毎回の授業内容や宿題）事前に入手することが可能であり、すべての提出物はメールソフトを用いて教員のもとへ届けられる。学生の PC は音声認識ソフトで発音を調整する訓練が可能な状態にあり、インカムで個々の音を常に確認できるようになっている。教員の PC はプロジェクターからスクリーンに投影され、学生が授業展開に応じて同一の情報を入手できる。

教員には十年ほどの教授経験があり、英語教育の現場で一般的に言われている四技能（話

す・聴く・読む・書く)を分割して教えることに違和感を抱いている。具体的には、文法だけを体系的に教える授業と会話だけ特別なクラスを設けることや、講読の授業から発音指導を除外することに対し不満を抱いている。また、聞いたこともない音声を自然なスピードで学習者に聞かせ、その内容把握を要求することや、発音したこともない文の構造を説明する能力を学習者に持たせようとするのを重視していない。総合的な英語教育とは、(どの部門を中心に指導するのかについては、かなり議論の余地があろうとも)すべての部門に関わる知識をより広く、より効果的に提示することが重要であると信じている。最終的な評価は、学年統一の試験を中心に、毎回の授業で行なわれる小テストや、4週間ごとに行なわれる300語ほどの中テストの結果から算出される。

0-2. 授業の基本パターン：教員のくせ

多くの場合、教員は「先生」と呼ばれる。同様に、我々は自分の師を先生と呼んでいた。この事実から推測されるのは、どの教員も恩師を「先生」と呼んでいたということである。更に、その恩師もまた、その先の恩師を「先生」と呼んでいたのである。この一連の関係から、学習者は、大いに予備知識を得ることが可能である。それは、自分の恩師がわかりやすい授業をする場合、その恩師の師はやはりわかりやすい授業をしているという事実である。恩師の授業から熱意が伝わってきたら、その恩師の師に感謝するべきなのである。もちろん個人の努力によって授業が「先代」よりわかりやすく仕立てられている場合もある。しかし、授業内容に関して言えば、自らが知っている範囲のことしか教えられないというのも事実である。恩師の授業に不満を抱いていた学習者には、先代より腕のよい「職人」になった者も少なくはない。その場合でも、授業のペース配分や口調には、先代の影が見え隠れするものである。

試験問題の作成方法や授業中に投げかけられる質問の形式も同様で、とりわけ、語彙に関する問題には恩師の作問形式が反映していることが多い。ある単語を黒板に書き、その上にアクセント記号を施す。そして、その上下左右のいずれかに屈折や派生の接辞が加えられた単語が記される。本文を読み進めていくうちに、先ほど記された語が現れると品詞の転換についての質問がされて、アクセントの移動や発音に著しい変化が伴う場合には繰り返し練習をすることになる。

単語に関わる問題が取り除かれると、今度は複合語や慣用表現へと移り、単語の組み合わせからだけでは目標となる意味に到達できそうにない成句表現(イディオム)に注意を促す。部分的な単語の入れ替えによるパターン練習や、本文の句構造を意識させる「区切り」を入れながら読み進められることもある。文全体の意味が取れるように準備した後に、数行の暗唱をし、自然な速度で音読できるまで練習を繰り返す。本文を細かく翻訳するというよりも、学習者が要約できる程度に訳語を与え、できるだけ多くの時間を聴き取りや章末に用意された練習問題に当てる。こうして、大まかな内容が伝わった時点で文法の説明に入るというの

が、一週間に二単位を確保している英語の一般的な授業である。途中で小テストや作業を織り交ぜても、多くの大学で採用されている教材なら、二回の授業で一つの単元が終わる計画になる。こうしたペースの授業を受けている学習者は、どのようにして語彙習得をしていけばよいのであろうか。

1. 空所補充：Gap-filling

最も基本的な語彙問題は空所補充である。英文の途中でカッコが設けられており、選択肢を置くかどうかで難易度が変動する。この問題形式は近年、多くの大学が採用している TOEIC® テスト Part V でも必ず出題される。TOEIC® では文法関連の問題とともに出題されるので、語彙習得の方法として利用する価値はある反面、学習者が出題される語の意味領域を確定するまでは困難を伴うことが予想される。

範囲が設定されている試験の中で行われる空所補充問題の場合、学生がこの後説明する取り組みを実施すればよいことである。学年統一試験や中テストに対応させるには、学習者に一定数の単語リストを配布することを奨励したい。学習進度の早いグループに属する学習者には、限られた文脈から意味を推測する能力が備わっているかもしれないが、学習進度の遅いグループの学習者というものは、取り組みの方法が見出せないことで学習意欲を減退させる者が多いからである。与えられたリストの範囲から出題されることになれば、範囲が決まっている試験と同様の取り組みが可能になるからである。

半期 14 回の授業であれば 1,200 語ほどの量が必要である。毎回の授業に単語のテストを取り入れる場合、毎回、100 語程度が出題されることになるからである。また、配布されるリストはデータ形式に加工された状態で提供されることが望ましい。学習者に加工方法を指導しておけば、独自の単語帳を作成し、個々の進む分野で求められる語を追加していくことや、品詞別・アルファベット順への並べ替えが簡単な操作によって行われるからである。語彙の知識を用いれば、特定の品詞に頻発する接辞に意味を見出すようになる。

2. 語形変化：Inflection and Derivation

多くの場合、語形変化を求める問題は文法問題として設置されている。この問題の特徴としては、質問内容の前後に十分な文脈が与えられていることが多く、使用可能な語数が限られている学習者にも解の機会が多く潜んでいる。

この問題を異なる角度から見ると、TOEIC® テスト Part V・VI として受け取ることができる。例えば、本来なら原形不定詞が続く使役動詞の構文において、問題には誤った屈折語を置いてある。学習者は、知り得るすべての統語的な知識からどのような選択肢が考えられるのかを絞り込み、最終的に判断の基準として文全体を見渡すことが求められる。具体的には、そのヒントが時制なのか、動詞の性質なのか、主語と述語動詞の数量的一致なのか、語順なのかを判断することが求められる。この種の問題には練習も大切であるが、問題を解く

ごとにヒントとなりうる情報のリストを作成する作業が必要であろう。こうした場合にもコンピュータは学習者の助けとなり、どのような問題に対し、どのようなヒント（言語の知識）が有効であるかをデータベースとして構築していくことで、正解率を上げることが可能になるのである。

3. 感覚関係：Sense Relation

意味の体系における関連付けを求める問題は、ある意味において、語形変化の問題でもある。この問題に対応していくためには、モデルとなる語の感覚関係を設定し、常にその結びつき（network）を拡張していく努力が必要である。そのモデルとして、下の図を利用することを推奨する。

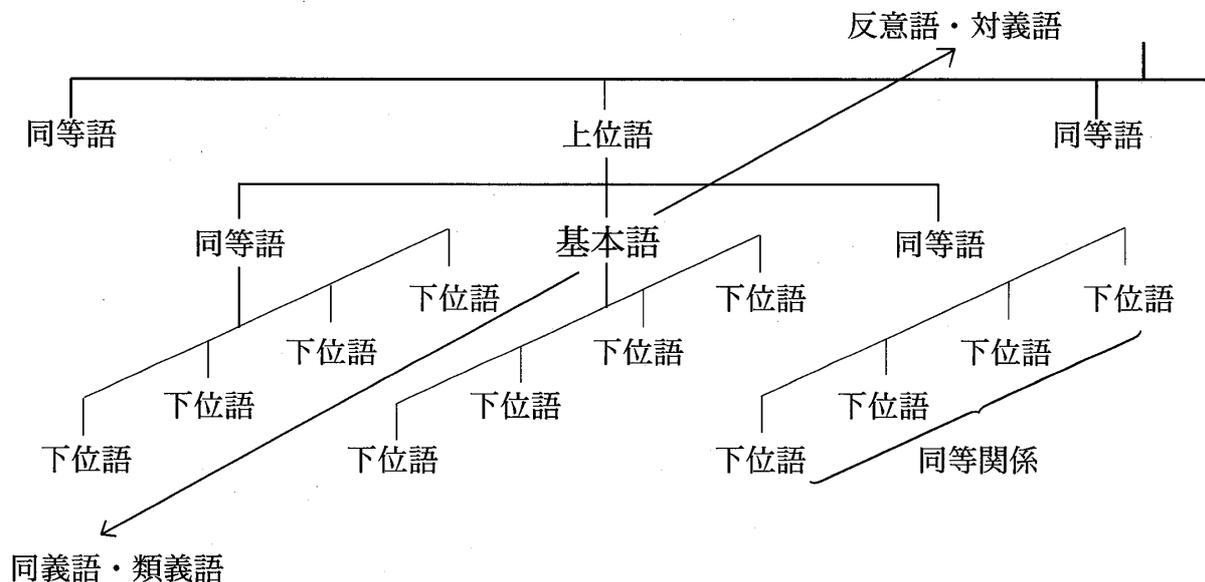


Figure 4. 語の感覚関係

まず、基本語を中心に上位語と同等語の感覚関係を設定すると、基本語の下位語とともに、基本語の同等語に属する下位語が各四語ずつ記録可能である。ここに、同義語・類義語、反意語・対義語が加わり、基本語の上位語が並列関係にある二つの語に同数の構造関係があると仮定すれば、少なくとも二十語からなる体系を形成していくことになる。

この他、基本語を中心としたWEB型の図を利用することも可能である。まず、基本語を中心に、任意の線を放射状に描き、各線の一端にはカテゴリー（名）を記しておく。それぞれのカテゴリーに分岐する線を描き、同様にカテゴリーの小区分を作る（名づける）。そこに、個々の読み取った意味を表記して、類義関係や反意関係をもつ語に対し、任意に定められた線（例えば、破線や点線）を結ぶ。そこには、何らかの関係で意味が結びついた蜘蛛の巣状の図が完成することになる。複数の学習者に同一の基本語とカテゴリー設定をしても、完成

した図には必ず何らかの差が生じるのは、まさしく、個々の学習者が持つ辞書 (mental lexicon) が異なるからこそ起こる現象である。

4. 指定された範囲の語彙習得

パーソナルコンピュータがほとんどの家庭に普及した時代において、学習補助ツールとしてその価値を認め、授業に取り入れることが必要であると感じる。とりわけ辞書機能を備えたコンピュータが用意できる場合には、大いに活用すべきである¹⁹⁾。

単語リストを前にした学生への指示は、以下のようなものである。

- (0) 既に知っている単語には、自分にわかる方法でマークをしてください
- (1) どの単語でも結構です、意味・品詞・アクセントをエクセル形式で入力してください
- (2) 調べた単語の使用例から、前後、3語ずつを含んだものを別のシートに入力してください
- (3) 調べようとした単語の意味を部分的に知っていたら、その部分を別のシートに入力してください
- (4) 感覚関係の図 (或いは、WEB の図) を作成してください
- (5) 同じ単語を中心に表を作った人を探して、自分の表と比較してください

作成した学習者の個人リストからは、何度も繰り返し入力される語を抽出することが可能である。また、フィルタをかけることによって、本人が必要としない語の欄を削除することもできる。あえてコンピュータによる入力を実施しているのは、タイピングの速度を速めることに主眼が置かれているのではなく、学習者がキーの入力ごとに綴りを確認することにつながるからである。そうすることによって、ノートに文字を書くのと同じ効果を得ようとしているためである。

5. 拡張された意味の痕跡

メタファー的に拡張された意味は、あまりにも自然に受け入れられた結果、それがメタファー的な意味の拡張であることを認識することが困難な場合がある。逆に、根源領域と到達領域とが、文化的理由や歴史的な使用頻度の低下によって関連づけられない場合もある。そこで、2つの語 A と B の間に 3 語以上の通過点を設定し、学習者が意味の痕跡を辿る作業を導入する。

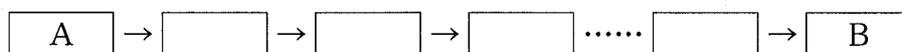


Figure 5. 意味の痕跡

この作業は、単に語源調査を求めるのではなく、メタファー的な意味の拡張と、意味のネットワークという概念体系を具現化するものである。

IV. 終わりに

語彙の研究を通じ、概念レベルから使用のレベルに向けた語彙の構築を中心に、英語教育を活性化させる可能性について考察してきた。言語体系全般から見ても、語彙研究の成果が日常の授業にもたらす貢献度は高く、意味を中心とした授業だけでもさまざまな工夫ができる。こうした取り組みが、何らかの形で学習者の動機付けに役立てば幸いである。また、前提条件として今回の授業に導入した IT 環境や時間割設定というものを単なる理想とはせず、授業実践の到達目標としてもち続けたいと思う。教育環境は与えられるものばかりではなく、教員が創るものでもあるのだから。

教育工学の知識が不足しているため、教材作成には言及できなかった。また、言語データの分析にまでわたる教授案の開拓も不十分となった。しかし、多方面から示唆に富んだ批判、指摘をいただけることと期待している。そうした方々から貴重なご意見を頂戴することこそ、より良い授業実践へ近づく一歩となり、更なる言語研究への原動力となるものだからである。

教壇に立ち、授業を行い、常に学生を評価する側になっている教員にとって、何よりも評価されることが耐えられなくなると言う。しかし、我々は学生の答案用紙によって評価されているのである。結果として表面化した事態を点数としてのみ解釈し、それを学生の能力判断の材料としてしか見なせなくなることこそ、大きな問題がある。学生の成績を自分の授業評価点として反省を重ねていけば、必ず答案用紙から何かを学び取ることができるはずである。最初から心に残る授業ができる教員などいない。だからこそ準備を重ね、学生との間にあるさまざまな隔たりを埋めようと努力するのである。

『あれほど準備をして、あれほど練習をしてきたのに、学生の反応がよくなかった』という時は、だれでも肩を落として研究室に向かう。授業準備が思うようにできなかった週の授業が思いのほか納得のいくものになった時には、思わず心の中で学生に手を合わせたい。こうした経験を重ねながら、いつも前向きな姿勢で授業へ向かわなければならないのが教員なのである。

最後に、学生の動機付けについて、述べておきたい。彼ら彼女らの学習意欲を高めるものは、洗練された英語教育に関する知識や最新の視聴覚教材だけではない。また、到達目標から遠く離れている所で個人的な信念を訴え続ける情熱でもない。それは、理論に裏づけされた確かな授業計画である。ここで言う授業計画とは、毎回の授業の中で、学生に何を求めているのかが明確にされることを意味する。いかなる語彙をどれだけ、どのように、いつまでに習得させようとしているのか、その延長上には、学習者の努力がどのように実を結ぶ可能性を秘めているのか。それは前回の授業とどのように関わり合い、次回へとつながっていく

ものなのか。こうした情報提供を惜しんでしまえば、どれほど準備をしても、よりよい結果は得られない。自戒の意味も込め、学生の動機付けに努力し続けていきたいと考える。

Notes

- 1) 確かに実践的な研究方法ではあるが、非常に多くの研究者がさまざまな理論を不特定多数の相手（生徒・学生）に応用するにとどまる場合が多い。その結論の多くも『実験結果には、被験者の示した反応との相関関係が見られない』という程度のものである。かなりの程度で教育の効果が期待（保証）されない限り、教室を実験場にすることは望ましくない。
- 2) 教育工学の研究では、応用言語学にマルチメディア等の最新技術を導入することにより、生徒・学生の学習意欲・効果を高めることに成功している例が多く見られる。しかし、教育工学では、言語理論の応用というよりも、「あらゆる可能性を技術の助けによって実現する」ことに重点がおかれている場合が多い。
- 3) パース (C. S. Peirce) の用語で、類像 (ICON)、象徴 (SYMBOL) に対する。類似性に基づく類像や、記号と指示物の間に有契性 (MOTIVATION) がなく、その関係が取り決めによって規定される象徴に対し、指標は記号と対象が近接的な関係 (⇒ CONTIGUITY) によって結び付けられている場合を言う。(現代言語学辞典：P. 298)
- 4) 談話レベルでは、話し手 (1 人称) と聞き手 (2 人称)、及び、両者発話が行われる時間的。空間的關係にかかわるもの。また、前方照応 (ANAPHORA) と後方照応 (CATAPHORA)、更には、外部照応 (exophoric) までも含まれることがある。
- 5) 認知言語学における類像性 (iconicity) とは、形式と意味が平衡関係にあり、一方に変化が起こると必ずもう一方にも何らかの変化が生じることを指す。
 - a. I think him honest.
 - b. I think that he is honest.
 上の例では、a. が直接的な経験から判断した「正直さ」であるのに対し、b. で得た情報は必ずしも直接的でないことを示唆する。その根拠としては、「思う」という動詞と「彼」との物理的な距離や、各項の「文法的な意味」と「構文がもつ意味」の差を挙げることができる。
- 6) コンピュータ上で文字数を数える場合には、[総スペース数 - 1] という計算式が用いられている。ここで言う「スペース」とは、シングルスペースのことである。
- 7) ここでは、複合語強勢規則 (Compound Stress Rule) と句強勢規則 (Phrase Stress Rule) を応用している。前者は『複合語では前部分に第一強勢を置く』、後者は『句の後側の要素に第一強勢を置く』というものである。
- 8) 形態的緊密性 (lexical integrity) : 統語規則は語の内部にまで浸透できない。語はまとまりをもった言語要素の集合体なので、その一部分を修飾することや、後方からの照応、或いは、代名詞によって言い換えができない。(景山：1997, P. 7-12)
- 9) 接辞や機能範疇に属する形態素までも包括する語彙項目 (vocabulary item) とは区別される。
- 10) 概念化 (conceptualisation) の過程で、語は句 (phrase)、節 (clause)、文 (sentence) と対立する。脳内では、言語使用に関わるすべての器官に (気管、舌、歯、口蓋、唇や、指、手、腕、顔の表情に至るまで) 運動信号が送られ、同時に言語使用上の制約 (社会・文化的なものから、場面・状況に関するものまで) を課すことで、よりの確な表現を選択する。
- 11) 副詞の場合、形容詞に接尾辞がついたものや (e.g. kindly, especially)、名詞句が文法化の過程で合成されたもの (e.g. sometimes, always) がある。また、歴史的に複合語として成立している

- ことが視覚的に解釈されるような前置詞を考慮して、このような表現を用いている。例えば、歴史的に存在が確認されている *yonder* が *be* 動詞とともに *beyond* を形成するケースである。(c.f. *beneath, below*)
- 12) 11 の説明に整合性を持たせる必要から、副詞の一部を除いている。
- 13) 例えば、*singer-songwriter, put up with (idiom), fortune-teller* など。
- 14) *A large fabric bag that is filled with feathers or other soft material and used as a cover on a bed* (Oxford English Dictionary)
- 15) *...from the Irish family name, Hooligan*
- 16) もとは *Light Amplification by Stimulated Emission of Radiation* の頭文字を並べたものであるが、動詞として「レーザー光線を投射する」という意味に転じることもある (c.f. *backformation*)。
- 17) 同じことが一般動詞の過去形を示す音素に起こっている。英語過去形態 (音) 素には /d/, /t/, /id/ という三つの異形態があり、語基の形態によって変化する。そこには一定の法則があり、/d/ 以外の有声音で終わる場合には /d/, /t/ 以外の無声音で終わる場合には /t/, /d/ と /t/ で終わる場合には /id/ となる。このような説明は、本来、形態音韻論 (*morpho-phonemics*) が扱うべき性質のものである。
- 18) 環境による語彙習得の差とは、海沿いで育った子供が魚の名前を多く知っているのに対し、山で育った子供は木や草花の名前を多く知っているという違いである。
- 19) 嘉悦大学の「学生ナビゲーションシステム」は、教科担当教員から受講生に授業情報を提供することができる。このシステムにより、教員は毎回の授業内容を掲示することや、資料を事前に配布することが可能であり、学生は授業情報から授業の準備、前回の内容確認等が可能となる。アンケート機能を用いれば、毎回の授業評価を行うことや出席確認も短時間で行うことができる。また、受講生全員にメールを一括送信するおこともできる。

参考文献

- | | | |
|-----------------------------|------|---|
| Bauer, L. | 1983 | <i>English Word-formation</i> , Cambridge, CUP |
| Carter, R. | 2000 | <i>Vocabulary: Applied Linguistic Perspective</i> (second edition), London, Routledge |
| Carter, R. and McCarthy, M. | 1988 | <i>Vocabulary and Language Teaching</i> , New York, Longman |
| Crystal, D. | 1997 | <i>The Cambridge Encyclopedia of Language</i> (second edition), Cambridge, CUP |
| Crystal, D. | 1991 | <i>A Dictionary of Linguistics and Phonetics</i> (third edition), Oxford, Brackwell |
| Cruse, D. | 1986 | <i>Lexical Semantics</i> , Cambridge, CPU |
| Givon, T. | 1984 | <i>Bio-Linguistics</i> , Amsterdam, Benjamin |
| Hopper, P. and Traugott, E. | 1993 | <i>Grammaticalization</i> , Cambridge, CUP |
| 池上 嘉彦 | 1975 | 『意味論』大修館 |
| Jackson, H. | 2002 | <i>Lexicography: An Introduction</i> , New York, Routledge |
| 景山 太郎 | 1999 | 『形態論と意味』(日英語対照による 英語学演習シリーズ 2)、くろしお出版 |
| Lee, D. | 2001 | <i>Cognitive Linguistics: An Introduction</i> , New York, OUP |
| Lyons, J. | 1977 | <i>Semantics vol. 1</i> , Cambridge, CUP |

- | | | |
|-----------------------------|------|---|
| Matthews, P. | 1991 | Morphology (second edition), Cambridge, CUP |
| 松本 裕治他 | 1997 | 『単語と辞書』(岩波講座 言語の科学 3)、岩波書店 |
| McCarthy, M. | 1990 | Vocabulary, Oxford, OUP |
| McCarthy, M. and O'Dell, F. | 1994 | English Vocabulary in Use, Cambridge, CUP |
| McCarthy, M. and O'Dell, F | 2002 | English Vocabulary in Use: Advanced, Cambridge, CPU |
| Nation, I. | 2001 | Learning Vocabulary in Another Language, Cambridge, CUP |
| 西光 義弘 (編) | 1999 | 『日英語対照による 英語学概論 (増補版)』くろしお出版 |
| Rudzka, B. et. al | 1981 | The Words You Need, London, Macmillan |
| Rudzka, B. et. al | 1985 | More Words You Need, London, Macmillan |
| 高野 秀之 | 2002 | 「言語のカテゴリー化 - 認知言語学的視点から」嘉悦大学研究論集第 45 卷 (82 号) P. 33-49 |
| 田中 春美 (ほか編) | 1988 | 『現代言語学辞典』成美堂 |
| Taylor, J. | 2002 | Cognitive Grammar, New York, OUP |